Caravaggio

TEXT BY ALFRED MOIR

139 REPRODUCTIONS
WITH 48 IN LARGE FULL COLOR

禁無断転載
本書の原著作権は Harry N. Abrams Inc.,
New York にあり日本における独占版権は
美術出版社に帰属します　　(1984. 4)
©

CARAVAGGIO

(日 本 語 版)

1984. 4. 25　初版
1990. 7. 20　3版

解説	ALFRED MOIR
訳者	若桑(わかくわ)みどり
発行者	大下　敦
組版	三和印刷株式会社
カラー印刷	凸版印刷株式会社
本文印刷	凸版印刷株式会社
グラビア印刷	三共グラビヤ印刷株式会社
製本	和田製本工業株式会社

発行所　株式会社 美術出版社
東京都千代田区神田神保町 2-36　相模ビル
TEL (234)2151(代)　振替 東京 5-166700
郵便番号 101
Printed in Japan

ISBN4-568-16055-3 C3371

C A R A V A G G I O

IV

CARAVAGGIO

ALFRED MOIR

若桑みどり訳

美術出版社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

2頁
1.オッタヴィオ・レオーニ
《カラヴァッジョの肖像》
黒チョークとホワイト

CARAVAGGIO: text by ALFRED MOIR

All rights reserved in all countries by Harry N. Abrams Inc., Publishers, New York

Japanese copyright © 1984 by Bijutsu Shuppan-sha, Tokyo

目次

カラヴァッジォ　アルフレッド・モワール　9
略年譜　61
図版　65
文献目録　163
索引　166

図版

1 果物かごを持つ少年　1593—1594年　ボルゲーゼ美術館，ローマ　66
2 病めるバッカス　1593—1594年　ボルゲーゼ美術館，ローマ　68
3 女占い師　1594年頃　ルーヴル美術館，パリ　70
4 音楽家たち　1595—1596年　メトロポリタン美術館，ニューヨーク市　72
5 リュートを弾く人　1595—1596年　エルミタージュ美術館，レニングラード　74
6 リュートを弾く人（部分）　76
7 聖フランチェスコの法悦　1596年頃　アシーニアム，バートフォード，ワズワース・エラ・ギャラップ・サムナーおよびメアリー・アトリン・サムナー・コレクション　78
8 悔悛のマグダラのマリア　1596—1597年頃　ドーリア・パンピーリ画廊，ローマ　80
9 エジプトに逃れる聖家族の休息　1596—1597年頃　ドーリア・パンピーリ画廊，ローマ　82
10 トカゲに咬まれた少年　1596—1597年　個人コレクション　84
11 バッカス　1597年頃　ウフィツィ美術館，フィレンツェ　86
12 ユピテル，ネプトゥヌス，プルートー　1597年　ヴィラ・ルドヴィージ，ローマ　88
13 アレクサンドレイアの聖女カテリーナ　1597—1598年　ティッセン・コレクション，ルガーノ—カスターニョーラ，スイス　90
14 ホロフェルネスの首を斬るユーディット　1598年　国立古代美術館，ローマ　92
15 聖マタイのお召し　1599—1600年　コンタレッリ礼拝堂，サン・ルイージ・デイ・フランチェージ聖堂，ローマ　94
16 聖マタイの殉教　1599—1600年　コンタレッリ礼拝堂，サン・ルイージ・デイ・フランチェージ聖堂，ローマ　96
17 聖マタイの霊感　1602年　コンタレッリ礼拝堂，サン・ルイージ・デイ・フランチェージ聖堂，ローマ　98
18 メドゥーザ　1600—1601年　ウフィツィ美術館，フィレンツェ　100
19 果物かご　1600—1601年頃　アンブロジアーナ図書館，ミラーノ　102
20 エマウスでの夕食　1600—1601年頃　ナショナル・ギャラリー，ロンドン　104
21 聖パウロの改宗（第1作）　1600—1601年　グイード・オデスカルキ・バルビ公コレクション，ローマ　106

22 聖ペテロの磔刑 1600—1601年 チェラージ礼拝堂，サンタ・マリーア・デル・ポーポロ聖堂，ローマ 108
23 聖パウロの改宗 1600—1601年 チェラージ礼拝堂，サンタ・マリーア・デル・ポーポロ聖堂，ローマ 110
24 聖トマスの不信 1601—1602年 ノイエス・パラスト，ポツダム 112
25 勝ち誇る愛の神（アモール） 1601—1602年頃 絵画室，国立美術館，ベルリン-ダーレム 114
26 若者と仔羊 1602—1603年頃 カピトリーノ美術館，ローマ 116
27 イサクの犠牲 1603年 ウフィツィ美術館，フィレンツェ 118
28 キリストの埋葬 1602—1604年 ヴァティカーノ宮絵画館，ローマ 120
29 ロレートの聖母（巡礼者の聖母） 1603—1604年 カヴァレッティ礼拝堂，サンタゴスティーノ聖堂，ローマ 122
30 この人を見よ 1604—1605年頃 個人コレクション，パラッツォ・ロッソ，ジェーノヴァ 124
31 洗礼者聖ヨハネ 1605年頃 ネルソン画廊，アトキンス美術館，カンサス・シティ，ミズーリ州（ネルソン財団） 126
32 蛇の聖母（あるいは馬丁たちの聖母） 1605—1606年 ボルゲーゼ美術館，ローマ 128
33 聖母の死 1605—1606年 ルーヴル美術館，パリ 130
34 ロザリオの聖母 1605—1607年頃 美術史美術館，ウィーン 132
35 エマウスでの夕食 1606年頃 ブレラ美術館，ミラーノ 134
36 洗礼者聖ヨハネ 1606年頃？ ボルゲーゼ美術館，ローマ 136
37 慈悲の七つの行ない 1606年 ピオ・モンテ・デルラ・ミゼルコルディア聖堂，ナーポリ 138
38 サロメ 1606—1607年 ナショナル・ギャラリー，ロンドン 140
39 キリストの笞打ち 1607年 カピトリーノ美術館，ナーポリ 142
40 聖アンデレの磔刑 1607年または1609—1610年 クリーヴランド美術館 144
41 ゴリアテの首をもつダヴィデ 1607年または1609—1610年 ボルゲーゼ美術館，ローマ 146
42 聖ヒエロニムス 1607—1608年 サン・ジョヴァンニ・バッティスタ大聖堂，ラ・ヴァレッタ，マルタ島 148
43 アロフ・ド・ウィニャクール，マルタ騎士団団長 1607—1608年 ルーヴル美術館，パリ 150
44 洗礼者聖ヨハネの斬首 1607—1608年 サン・ジョヴァンニ・バッティスタ大聖堂，ラ・ヴァレッタ，マルタ島 152
45 眠れる愛の神 1607—1608年 ピッティ宮美術館，フィレンツェ 154
46 聖女ルチアの埋葬 1608—1609年 サンタ・ルチア聖堂，シラクーサ 156
47 ラザロの復活 1609年 メッシーナ国立美術館，メッシーナ，シチーリア 158
48 羊飼いの礼拝 1609年 メッシーナ国立美術館，メッシーナ，シチーリア 160

謝　辞

私は長年にわたって，きわめて多くの同僚や学生や友人たちとともにカラヴァッジォの絵を眺め，それについて語り合ってきた。それ故，それらの人々から私が得た知識についてすべてを記すことはとうてい不可能である。しかし中でも私は特にブルース・デイヴィス，ハワード・ヒッパード，マリリンおよびアーヴィング・ラヴィン，故ミルトン・レーヴィン，ドナルド・ポズナーの援けに感謝しなければならない。さらに，《ロレートの聖母》については キャスリーン・ウエイル-ギャリスとヴァージニア・ボニートに，また，カラヴァッジォの音楽主題については メアリー・ケイ・ダッガンに，またローマの中央修復所で修復された絵画に関してはジォヴァンニ・ウルバーニ氏とモーロ教授夫妻に多くを負っている。

ガブリエル・オルトン，ケイト・ブラックスおよびクリストファー・ローズは，忍耐と能率と，知性とをもって私の原稿をタイプして下さった。カレン・エイナウディ-バルは私に図版を提供された。ハリー・N・エイブラムス社のスタッフはつねに私に協力を惜しまなかった。とりわけ編集者ジョアンス・グリーンスパン，絵画調査係エリック・ヒンメル，デザイナーのケネス・ウインザーの諸氏にはお世話になった。

また私はハードヴァ大学の芸術史研究所の図書館，ヴェネーツィアのマルチアーナ図書館，ローマのヘルツィアーナ図書館ならびにアメリカン・アカデミー，さらにカリフォルニア大学(サンタ・バーバラ)とそのスタッフの協力に感謝の意を申し述べたい。

イタリアにいるだけで私は楽しかった。その上，友人や同僚たちの親切さにつつまれて，本書を執筆したその期間は，私の生涯のもっとも幸福なる時であった。彼らすべてに感謝を記したい。

アルフレッド・モワール

2. イタリア半島とシチーリア島の地図。カラヴァッジョの旅程とその年代を示す。

CARAVAGGIO

カラヴァッジォと通称されているミケランジェロ・メリージ（2頁の肖像画参照）は，39歳の誕生日の数か月前に死んだ。今日知られているかぎりでは，彼の活動期間は20年に満たない。彼がローマに来てから死ぬまでに18年があった。その間に，彼は何度も裁判沙汰を起こし，国際的な文化的中心地であるローマの町を若い画家たちを引き連れて遊び歩き，目ざましい成功をおさめ，見知らぬ土地に冒険的な旅をして歓迎され，数々の不運に見舞われ，流亡し，孤独の中に死んだ。彼は稀にみる知性の人であり，自己の才能を充分に発揮する機会に恵まれ，高位の保護者の寵を得，そして多くの場合高い報酬を得ていた。それにもかかわらず，彼の性格は気むずかしく孤独で，怪しげな性欲を持ち，円熟期をむかえたときにも，おどろくほど奇行が多かった。

だが，それでもなお，彼は西欧の芸術史上もっとも感動的な宗教画を何枚か描いている。それらの作品の価値が認められたのはようやく近年になってのことである。すでに彼の生前から彼の芸術を否定する見解が多く，その後3世紀にわたって，美術批評は彼を軽視してきた。彼の同時代人で画家でもあり歴史家でもあったジォヴァンニ・バリオーネ（1571—1644）は，1642年に，彼は“絵画を破壊した”と書いた。19世紀のジョン・ラスキンは，彼の作品の中に，“…恐怖と，醜悪さと，罪の汚穢”を見た。だがともかくも，彼の作品の大部分は今日まで残っている。そして現在では，彼は，ミケランジェロ以後，ティエポーロ以前のイタリアの芸術家の中でもっとも広く崇敬されている芸術家になった。しかも，それは彼と同時代の17世紀の巨人たち，ルーベンス，レンブラント，ヴェラスケスそしてフェルメールに劣らない。

カラヴァッジォが後世に遺した作品はそれほど多くはない。本書の48枚の色刷り図版は，真作として知られているカラヴァッジォの作品の現存するもののすべてである。この他多少問題のある作品にしても，1ダースよりは少ないであろう。たとえ彼の作品が量的に少ないとしても，質的にはほとんどそれは無限大である。この質の高さは，ある点では彼が助手なるものをほとんどか，あるいは全く使わなかった故である。もしもある絵画がカラヴァッジォの真作だとするならば，それは始めから終りまですべて彼自身の手によったものである。さらに重要なのは，それらが，彼自身の注目すべき精神の自作だということである。

彼は，おそらくミラーノに，1571年の夏の終りか秋の初めに生れている。彼の父はフェルモ・メリージ（1540頃—1577）で，母はルチア・アラトーリ（1590年歿）である。彼らは1571年1月14日に結婚している。カラヴァッジォは，彼らの4人の子供のうちの第1子であった。何世代かにわたってメリージ家はロンバルディア地方の小さい町カラヴァッジォに住んでいた。これは，クレモーナ，ブレッシァ，ベルガモの各都市から等距離のところにある。おそらく，彼はローマに出てから，彼の出身地の名をとって自分の名としたのであろう。彼の父はカラヴァッジォの侯爵の建築師として働いていた。5歳までカラヴァッジォは彼の家族と共にミラーノに住んでいた。この侯爵はミラーノに主な住居を構えていたのである。しかし，1576年に彼はミラーノを襲ったペストを逃れて故郷の町に送り返された。残りの家族は翌3年カラヴァッジォに帰ったが，その年の10月に父が死んだ。

ミケランジェロは，カラヴァッジォで大きくなった。一家は貧

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

乏のどん底でもなければ頼りになる資産がないわけでもなかった。父は侯爵家の気に入りの家臣で，カラヴァッジォの町の内外に相当の財産を持っていた。父の弟のルドヴィーコはローマで神父となったし，次男のジォヴァンニ・バッティスタも，ジェスイットの神学校で神学を学び，1599年にベルガモの主教の副執事となっている。

カラヴァッジォは恐らく，少なからぬ正式の教育を受けたものらしい。彼は確かに宗教問答を学んだし，読み書き算数ができた。またラテン語の能力もいくらかあったにちがいない。その芸術的教育は1584年の4月に，ミラーノの相当の能力のある画家シモーネ・ペテルツァーノ(1573年—96年間に活動)のもとに徒弟として入ったときに始まった。彼はミラーノでは多少成功した画家だったが，彼の弟子が有名にしなかったならばその名を歴史にとどめることはなかっただろう。ペテルツァーノは自分でティツィアーノの弟子と署名していた。だが彼の様式は，ヴェネーツィア的であるのと同じ程どにロンバルディア的であった。1585年に彼はローマにいた。彼の若い弟子も何の記録も残っていないとはいえおそらく彼と共にローマに行ったであろう。画家が徒弟修業をすることは，長い間の伝統だった。それ故，カラヴァッジォだけがその例外だったと推測する理由はない。彼はたしかに油彩とフレスコの技法を学んだ。また解剖学や遠近法についても，空間，光および陰影の表現法，そして色彩の技法について学んだはずである。

ミラーノでのカラヴァッジォの体験はあまりためになるものではなかった。この町はその頃無法地帯であって，若い画家はそこで暴力を振うことを覚え，権威への敵意を身につけたが，これは彼の円熟期を脅かすもととなったのである。17世紀におけるもっとも信頼できる伝記作者はジォヴァンニ・ピエトロ・ペルローリ(1613—1696)だが，彼はカラヴァッジォが何らかの犯罪をおかしたためにミラーノから逃亡しなければならなかったのだと言っている。ただし，このことについては，ミラーノ警察の記録は存在していない。

カラヴァッジォが1588年に徒弟の期間を了えたときには，彼は17歳で，自分の工房を作るには若すぎた。彼の家の財産に関する記録によると，1589年から92年まで，彼は毎年カラヴァッジォの町の中で歳費を与えられている。しかしそれだけでは若い芸術家をまかなうには充分ではなかったのか，あるいは彼が関心を持つには少なすぎたのであろう。そこで，どうやら彼は，自分のできる仕事や，注文を探して，ロンバルディア，ヴェネト地方を旅し，ペルローリが報告しているように，ヴェネーツィアにま

3. アントーニオ・カンビ　《牢の中の聖女カテリーナを訪れる皇妃ファスティーナ》　1583年
カンヴァスに油彩　サンタンジェロ聖堂，ミラーノ

4. ジローラモ・ロマニーノ　《聖マタイの霊感》
1521年　カンヴァスに油彩　サン・ジォヴァンニ・エヴァンジェリスタ聖堂，ブレッシァ

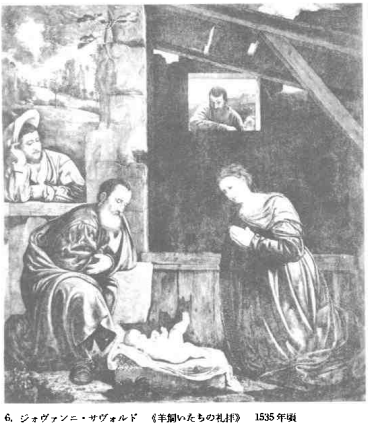
で出かけていったらしい。

1592年5月11日，カラヴァッジォの親の財産が最終的に分割された。1590年に母が死んでいる。彼の分与は393帝国リラで，1年か2年充分暮らせるだけの額であった。彼はそれを持ってローマに向かったにちがいない。どのような道程を経てローマに行ったかはまだ研究されたことがない。多くの旅行者は，ミラーノから古いエミリア街道を経てパルマからボローニャを抜け，

5. モレット・ダ・ブレッシァ　《シモンの家のキリスト》　1550—54年頃
カンヴァスに油彩　230.2×140 cm
サンタ・マリーア・カルケラ聖堂，ブレッシァ

山を越えてフィレンツェに行き，シエナかアレッツォを通ってローマに行った。スペインの画家フセーペ・デ・リベラは，1616年にこの道を通っている。たぶんカラヴァッジォも同じであっただろう。

その時の彼の財産は，ナップ・ザックか，頭陀袋の中に充分に入ったにちがいないが，彼が精神の中に持っていたものは，それ程少ないものではなかった。ミラーノで修業したおかげで，画家としての基礎的な技術の傍かに，肖像画にも静物画にも卓越した腕前をもっていた。修業時代と，北イタリアの遍歴時代を通じて，彼は北イタリアの古今の主要な画家たちの作品と馴染んでいた。彼はそれらの北イタリアの画家たちから，光を描く方法を吸収していたのである。かなり特異な，熟練したマニエリスムの画家であるアントーニオ・カンビの，人工灯火を使った実験もそのひとつである。カンビは，カラヴァッジォがミラーノに来るまさに1年前に，ミラーノにおけるもっとも野心的な作品を描いていた（挿図3）。また，ジローラモ・ロマニーノ，モレット・ダ・ブレッシァそしてジォヴァンニ・サヴォルドなどの作品にみられる抒情的な啓示としての光（挿図4～6），ヤコポ・ティントレットの作品にみられる，劇的な力としての光などである（挿図7）。カラヴァッジォはロレンツォ・ロットの肖像画における，人間の性格の中まで見透すような内面的な光線も発見した。彼はベルガモにあったロットの《本をもつ少年》（挿図8）なども目にしたであろう。また彼は，パオロ・ヴェロネーゼやティツィアーノの肖像画（挿図9・10）の気品ある偉大さにもふれたにちがいない。彼はジォルジォーネの風俗画（挿図11）の簡潔な構図を学ぶ機会もあった。ベテルツァーノ，アンブロージォ・フィジーノ，ヤコポおよびフランチェスコ・バッサーノ（挿図12）などから，そのすぐれた構図をとり入れたであろう。また，ティツィアーノの物語絵（挿図13参照）や，ティントレットのいきいきした群衆や，ラッファエルロの《アテナイの学堂》の巨大な下絵（これは今もミラーノのアンブロジアーナにある）からも学んだであろう。この下図は，1610年に，ミラーノの親類から，枢機卿フェデリーコ・



6. ジォヴァンニ・サヴォルド　《羊飼いたちの礼拝》　1535年頃
カンヴァスに油彩　191.1×180 cm
旧サンタ・バルバラ聖堂跡（現在はマルティネンゴ画廊，ブレッシァ）

7. ヤコポ・ティントレット　《聖マルコと奴隷の奇蹟》　1548年
カンヴァスに油彩　420.4×541cm　アカデミア美術館，ヴェネーツィア

ボローメオの手にうつっていたのである。

彼は，田園ですごした若い日々の，日常的な牧歌を，芸術の神聖さにふさわしいものと認めていた。ベルゴニョーネの祭壇画に描かれた薔薇や果物の籠などの魅力的な細部（挿図14）や，ヤコポ・バッサーノの家庭的な詩（挿図15），サヴォルドの堅実で，古く，単純なものへの愛，ヴィンチェンツォ・カンビの，農産物のパノラマ的展示（挿図16）などは，みな彼にそのような霊感を与えたものであった。疑いもなく，彼は北ヨーロッパの静物画も研究している（挿図17参照）。ローマへ行く道すがら，彼はエミリアとトスカーナの芸術の豊かな富を目のあたりにしたであろう。ボローニャには，ペルレグリーノ・ティバルディ（挿図59）があるし，フィレンツェにはフェデリーコ・ツッカロ（挿図18）があった。しかし，そこにはまたミケランジェロの《勝利》のような偉大な彫刻作品もあった（挿図19）。彼は感受性豊かで感銘を受け易い人であったから，見たものの多くに反応し，それをその記憶の中にとどめて，将来の参考にしたのである。たとえば，彼の画歴もかなりおそくなってから，カラヴァッジォの町にあるニコロ・モイエッタの祭壇画（挿画20）や，ジョリオ・カンビの

8. ロレンツォ・ロット　《本をもつ少年》　1525—26年頃
板に油彩　34.9×27.9cm
スフォルツァ城，ミラーノ

《聖女アガータの埋葬》（挿図21）や，モレットの《聖パウロの改宗》（挿図22）や，アンブロージョ・フィジーノの独自な《蛇の聖母》（挿図23）が，彼の精神が，いかに強靱なる記憶力をもっていたか，それがいかに広汎な範囲のイメージを保存していたか，また，いかに彼がそれらを活用したかを明示することになるのである。

おそらく，カラヴァッジョは1592年の秋にローマに到着した。1600年当時，ローマの人口は109,729人で，現代の規準からみれば，人口の少ない町であった。洪水，飢饉，ペストなどの自然の大災害がしばしば襲ったにもかかわらず，この町は，広々として美しい町であり，絶対的であるにしても寛大な行政府のもとで平穏であり，繁栄し，次第に人口を増しつつあった。ナーポリとヴェネーツィアはローマよりも大きかったし，フィレンツェとミラーノはより重要な商業都市だったが，しかし，依然として多くの道はいまだにローマに向かっていた。

教会がこの町を支配していた。教皇領は，中部イタリアの大部分を占めていた。プロテスタンティズムが興っていたにもかかわらず，教皇はやはりキリスト教世界第一の宗教的指導者だった。ローマは，教皇庁首都として，ヨーロッパにおける外交的活動と陰謀の中心地だった。芸術上の中心地としてはこれに比肩するものもなかった。将来のあるヨーロッパの芸術家のうち，ローマに行くことを志さない者は稀であった。ほとんどの芸術家はローマに行っている。数少ない例外は，主にプロテスタントの北方の芸術家たちであった。

ローマは，世界的首都であった。そこで活躍している多くの芸術家がローマ生れではなかった。多くの者が，研究のためと，保護者を探すためにこの町にやって来た。また保護者たちは，最上の芸術家による最新の作品を探してこの町にやって来た。カラヴァッジョはその頃新しく選ばれたアルドブランディーニ家出身の教皇クレメンスⅧ世（1592—1605在位）やその一族の気に入られなかったものの，彼に益する支持者を得ることはできたのである。彼が独立した時に，これらの支持者たちは，彼の奉仕に匹敵するだけの恩恵を与えたのであった。

それは小さい世界であった。1603年，カラヴァッジョは，ローマに住むほとんどの画家たちを知っていると宣言していろし，また彼の知人はさらにそれ以上に広かった。それはまた，多くの面をもつ複雑な世界でもあった——教皇とその宮廷がその中心を成していた。だが，そのほかにも多くのサークル——聖職者たちの，外交官たちの，貴族たちの，商人たちのそして知識人たちの——があり，それらがまたそこに重なり合っていた。カラヴァッジョは，ほとんどこれらすべてのグループと接触があった。彼の保護者たちは，富裕な個人と，宗教的な団体からなっている。彼はサン・ルーカ・アカデミーの会員で，文人たちの間にも多くの友人を持っていた。個人としても，また，インセンサーティ・アカデミーなどのメンバーとしても，多くの文化人と親交があった。その輪は小さかったが，変化に富んでいた。たとえば，ピオ枢機卿，マッフェオ・バルベリーニ卿（のちのウルバヌスⅧ世），詩人アウレリオ・オルシ，ガスパーレ・ムルトーラ，画家ジッゼッペ・チェーザリ（通称カヴァリエーレ・ダルピーノ，1568—1640）などである。この他の友人としては，詩人で宮廷人で冒険家のジョヴァンニ・バッティスタ・マリーノ，法律家のマルツィオ・ミレーージとアンドレーア・ルッフェッティがいる。カラヴァッジョは，聖人フィリッポ・ネーリがまだ存命中のときにローマに来ている。そして，直接に彼の説教は聞かなかったが，たしかにこの聖人が建てたオラトリオ会の教えをリヴァイヴァルし，普及するのに一役を買っている。また，彼の知識人との交際は生

9. パオロ・ヴェロネーゼ（伝）《パーゼ・グァリエンティの像》 1556年
カンヴァスに油彩 200×115cm カステルヴェッキオ美術館，ヴェローナ

10. ティツィアーノ　《アルフォンゾ・ダヴァロスとその息子》　1540—41年
カンヴァスに油彩　223.2×165.1cm
プラド美術館，マドリッド

12. フランチェスコ・バッサーノ　《福音書家聖ヨハネの霊感》
カンヴァスに油彩　256.5×155cm
バーミンガム美術館，イギリス

11. ジョルジョーネ　《コンサート》　カンヴァスに油彩　76.2×99.1cm
ハンプトン・コート，個人所有，大英帝国

涯を通じて長く続いている。たとえばシラクーサで，彼は考古学者で文学者でもあるヴィンチェンツォ・ミラベッラと友交を結んでいる。また，ベルローリは，枢機卿フランチェスコ・マリーア・デル・モンテ（挿図24）が，“彼の邸のうちに，紳士たちと共に，名誉ある場所を与えた”と述べている。このことはカラヴァッジョがローマの街頭でどんな恐るべきことをしたとしても，枢機卿の客間においてはけっしてそのようには振舞っていなかったということを示している。

ローマに来たとき，彼はちょうど21歳だった。彼は将来の成功を夢みていただろう。しかし，その頃の彼は，一見したところ，毎年のようにローマにやってくる大きな希望の他には何ひとつ持っていない多くの無名の才能ある青二才たちとまったく変わったところはなかっただろう。このころの彼には，いつ，何が起こったか，だれにもわからないのである。このようなわけで，彼の年

代記はここでひとつの難所を迎える。1592年から1599年の間のことに関しては，まったく1日も日付けがわからないし，この間については作品を様式的に分析した結果や，あるいは伝記作者たちが書いている出来ごとを土台として推測することしかできないのである。バリオーネは，彼が貧窮して襤褸をまとっていたと記述している。ところが，彼は，財産がなかったわけではない。彼は有能な肖像画家ですぐれた静物画家であった。たぶん，彼は自分への遺産のいくらかを，たとえそれが，さして長く続くものではなかったにせよ，蓄えていたであろう。そして，彼が予見することのできなかった好機はやってきた。

おそらく，彼がローマにやって来たとき，彼を家に泊めたのは叔父のルドヴィーコで，彼が，カラヴァッジォの最初のパトロンであるパンドルフォ・ブッチ（1530頃—1614）を見つけたであろう。彼はレカナーティ出身のヴァティカン付の法律家であった。ブッチは理想的なパトロンではなかった。彼はこの若い被保護者（プロテジェ）に，宗教画のコピーを作ることを命じ，それをレカナーティに送っている。これはすぐに失われ，忘れられた。カラヴァッジォは彼のことを“モンシニョール・インサラータ(サラダ殿)”と呼んでいた。というのは，彼が夕食にサラダしか出さなかったからである。カラヴァッジォはすぐそこを出た。彼は，今ではもう歴史から姿を消してしまった2人の二文画家のもとで仕事を見つけて，1日に二つの頭部を描いたりして，パンの種にしたのであった。そののち彼は，サン・ルイージ・デイ・フランチェージ聖堂の近くの画商ヴァレンティーノと識り合いになった。彼はほんの少ししか支払わなかったが，作品を一般に知らせるには役に立った。この頃彼には何人かの友人ができた。シラクーサ出身の15歳の画家マーリオ・ミンニーティ（1577—1640）は，カラヴァッジォがローマに来た直後の1592年の12月にローマに来て，1600年まで仲間であり，あるいは助手もしたと思われる。ベルナルド・チェーザリ（1571—1614）は，前述のダルピーノの弟で，カラヴァッジォ自身と同じくらいはめをはずす傾向があった。また，プロスペリーノ・グロッテスケと呼ばれたプロスペロ・オルシ（1558頃—1633）は，装飾的なフリーズや，花飾りやそれに似たもの（挿図25参照）の専門家であったが，カラヴァッジォの独立に力を貸した。

たしかにカラヴァッジォは貧乏だった。しかし，たとえば《病めるバッカス》（色刷り2）などを見ると，その生活は愉快なボヘミアン風で，野放図で，テネシー・ウイリアムズがローマにいた頃，スペイン広場に集っていたプレ・ビート世代のように，金のかからない快楽を大いに楽しむという点では豊かな暮らしであった。事故がなかったわけではない。カラヴァッジォは，たぶん，1593年に馬に蹴られて，コンソラツィオーネ病院に入った。彼はそこで親切にされたので，院長のために何枚かの絵を描い

13. ティツィアーノの原画によるマルティン・ロータの版画　《殉教者聖ペテロの死》（この絵はもとヴェネーツィアのサンティ・ジォヴァンニ・エ・パオロ聖堂にあった）　メトロポリタン美術館，ニューヨーク　ジョセフ・ピュリーツァ氏購入，1917年遺贈

14. ベルゴニョーネ　《玉座の聖母》部分　1480—85年頃　板
アンブロジアーナ図書館，ミラーノ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com